

漁業資源の管理と漁業者

最近、テレビのグルメ番組などでよく放映される漁業者、まさに広大な海の点でしかない魚群を追い求める「海の男」に多くの人々がロマンを感じるからだろう。私もその一人、母方の祖父が南氷洋捕鯨船の砲手であった血もあるのか魚と格闘する姿は私を熱くする。もっとも私は漁業の経験はなく、信漁連の役職員として40年、数多くの漁業者との邂逅^{かいごう}があり、色々なことを学び、教えられてきただけである。

本稿では、個人的見解だがと断った上で私が受け止めた漁業の実態や漁業者の気質の一部を紹介しながらこれからの課題等につき考えてみたい。

現下の課題は、民主党政権下、農業と同様、新政策として水産業にも導入される「資源管理・漁業所得補償対策」に如何に対応してゆくかである。

海を泳いでいる魚は、法律上無主物、誰のものでもない。それを漁業者が手に入れた途端、経済的価値が生じ財となる。しかし、魚が生まれ育ち、財となる過程に漁業者が係わることは殆どなく、海と豊かな自然が全部やってくれる。そして、生産の場である海は漁業者個人のものではない。近年、種苗技術の進歩による稚魚の放流や人工の魚礁設置等様々な試みが行なわれているが、あの広大な海と天然の魚礁に優るものはない。漁業者の経営観と自由と独立の気質はこの海との係わりにあると思っている。

海は宝庫、魚を獲る努力と創意工夫次第で収入が増え、誰からの規制もなく、煩わしい社会とも無縁でいられる。このような海がもたらす恩恵への楽観と期待感が漁業者意識の根底にあり、なかでも主流の漁船漁業にその傾向が強い。しかし、沖合、沿岸を問わず現実の経営は年々厳しくなるばかり。漁船漁業は、今や漁獲が装備の優劣によって決まる、競争に打ち勝つための装置産業化しているからだ。例えば、20トンのイカ釣船は集魚灯、GPS、レーダー、ソナー、魚群探知機等がズラリと並びそれらを集中管理するパソコン、まるで管制センターのコクピットと見紛うばかり、投資額は1億円を上回る。この投資を回収するための熾烈^{かたき}な漁業者同士の競争、その行為を「敵地に乗り込み攻撃する」「港を出たら全部敵」と表現する漁業者もいるほど。技術の開発進歩に順応した管理能力の欠如を指摘する識者もいるが、漁業者は生き残るため魚を獲って収入

を増やす以外に方法はなく、資源を食い尽くす競争の中に身を置くしかないのが実態である。しかもこの状況は大戦後の動力化が発端となって60年、技術と装備の近代化を伴い今日に至った長い過程があり、漁業者自身の責任のみならず、資源と漁獲の調整にあまり力を入れず、個別経営の近代化政策をすすめてきた行政とその片棒を担いできた漁協系統組織にも責任がある。特に、漁業者の自立を促進し、計画的な経営のあり方を求める協同組合の最も大切な指導事業をなおざりにしてきたからだ。更にもう一つは、資本による不公正と格差である。米に対してかつてあったような公的管理もないまま、大手水産会社や商社による輸入魚の急増と経済の長期デフレが招いた魚価安、経営の死活を握る燃油の高騰等々市場原理優先の政策が今日の水産業衰退の構造的要因でもある。

そこで、冒頭の資源管理と所得補償のことである。もっと早くからあったらという思いもあるが、この政策が成功すれば日本の漁業を改革する出発点になり得るのではと期待している。ただ、漁業者の収入安定を確保する金銭面の手当も大切だがそれよりも前提となる計画的に資源管理に取り組む漁業者の意識改革がより重要であることを指摘したい。

言うまでもなく、漁業資源はリサイクル資源、人智による管理さえできれば再生産と維持が可能である。そのことにより資源の減少はくい止められ、漁業者同志の争いの元を断ち切ることもできよう。また、魚価安定のため水揚を調整することも可能、従って、資源管理は我が国漁業の持続的発展のためには避けて通れない課題だと認識は水産界で共有されている。ところがいざ実行となると個々の漁業者の意識や実態とのギャップが大きく困難を伴う。

そうは言いながらも全国の一部の浦浜では多様な方法が実行されている例もある。そこに共通しているのは、その地域、あるいは同業者が全員参加していることだ。農業の所得補償の場合、参加自由とされているようだが、漁業の場合、一人でも抜けると漁業者同志の軋轢や争いの原因になりかねないから、資源管理は関係する全漁業者の合意と参加が何としても必要となる。そして、調整と合意形成の場は漁協となろう。特に、指導事業への人材投入と漁業者の意識改革のための学習活動の強化が喫緊の課題となってくる。行政も直接補償への対応にとどまらず、漁業者、地域、漁協が一体となった取り組みに意を注ぐべきだ。水産業界で長く続いてきた競争の時代から協同の時代へと変えるには長い時間も必要ということも肝に銘じてほしい。

(長崎県信用漁業協同組合連合会 代表理事会長 馬場元朝・ばばもとのり)